

Dr. 松木の内科で診る 泌尿器科疾患【膀胱炎】



松木孝和（松木泌尿器科医院院長／香川大学医学部臨床教授）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。

▶HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶登録手続

1. なぜ、内科で“膀胱炎”を診るのか? ————— 2
2. どのように考えて、“膀胱炎”を診るのか? ————— 2
3. どのようにして、“膀胱炎”を診るのか? ————— 4
4. “膀胱炎”と“診”間違ふのはどんな疾患か? ————— 6
5. 治療方針を決定する ————— 9
6. どんなときに“膀胱炎”を、診れないのか? ————— 14
7. 合併症状はどのように“診て”いくのか? ————— 15
8. そのとき“膀胱炎”を診るだけで良いのか? ————— 16

▶HTML 版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツ
を制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

1. なぜ、内科で“膀胱炎”を診るのか？

急性膀胱炎は女性にとって日常的にみられる一般的な感染症で、基本的には消化管常在菌等による外尿道口からの逆行性感染症である。ほとんどの急性膀胱炎は適切な抗菌薬が投与されると速やかに軽快する。

近くに泌尿器科があれば紹介するのも良いが、アクセスの良いかかりつけ医師のところで治療を行ったほうが患者の利便性が高い。膀胱炎および膀胱炎様疾患のほとんどは問題なく対応可能なはずである。

2. どのように考えて、“膀胱炎”を診るのか？

常識的に考えると、膀胱炎の治療は“適切な抗菌薬を投与する”ことが基本である。しかし、わが国においては各識者(ガイドライン等も)によって、勧めている抗菌薬が異なる点が現場に混乱を引き起こしている。本稿では抗菌薬の選択に関してはガイドラインを示しながら、筆者自身がどのように対応しているかを紹介したい。

膀胱炎において、抗菌薬の選択は非常に重要であるが、命に関わることが少ないことや、ほとんどの抗菌薬投与に反応するという点を考慮すると、実際の治療にあたって最も大切なことは、治療からの視点に沿った膀胱炎の分類・整理である。

膀胱炎を実際に治療に沿って分類すると、単純性と複雑性にわけることができる。単純性膀胱炎は尿路感染症を引き起こす原因のないもの、複雑性膀胱炎は原因があるものと考えて良い(表1)。

表1 主な複雑性膀胱炎の原因と解決方法

原因	解決方法
尿路腫瘍・尿路結石	各原因の除去
前立腺肥大症	内服などによる前立腺肥大症への介入
神経因性膀胱などによる残尿の増加	残尿量を減少させる工夫
尿路カテーテル留置	カテーテルの抜去
糖尿病など・易感染状態	原因への対応

膀胱炎が慢性化するためには通常、何らかの原因が必要なので、慢性膀胱炎はほぼ複雑性膀胱炎であるのが実際のところだが、急性膀胱炎には単純性と複雑性の両方が混在している。しかし、急性複雑性膀胱炎の場合は治療に反応しにくく、治ってもしばしば再発するので、経過を追っていくと慢性膀胱炎へと移行することが多い。

重要なのは、この両者の間では治療方針が決定的に異なることである。単純性膀胱炎は適切な抗菌薬を投与すれば速やかに完治するが、複雑性膀胱炎の場合には原因を併せて取り除かない限り経過が思わしくないことが多い。

疫学的にはほとんどの膀胱炎は女性に起こり、そのうち急性単純性膀胱炎がほとんどを占める¹⁾。一方、男性に尿路感染症がみられた場合には、急性尿道炎などの性行為感染症、前立腺など精路炎症の存在、あるいは複雑性膀胱炎の可能性を検討する必要があるが出てくる。男性には急性単純性膀胱炎は起こらないと考えるのが基本である。

したがって、尿路感染症を診た場合、女性の場合では急性単純性膀胱炎の治療を行いつつ、治療経過が思わしくないときは複雑性膀胱炎を疑って原因を探り、男性の場合には複雑性膀胱炎を前提に性行為感染症の除外を考慮しながら診療を進めていくことになる。

3. どのようにして，“膀胱炎”を診るのか？

膀胱炎，特に急性膀胱炎の診断は問診に尽きる。膀胱炎の症状として，排尿時痛・残尿感・頻尿・肉眼的血尿などが挙げられるが，特に排尿時痛が最も大切である。他の症状は，それぞれ様々な疾患でもみられることがあるが，排尿時痛，特に終末排尿時痛がみられた場合には急性膀胱炎があると考えてまず間違いはない²⁾。この終末排尿時痛の聞き取りは急性膀胱炎の診断にきわめて重要である。

実際の膀胱炎患者，特に過去に膀胱炎既往があるような患者は，しばしば手持ちの抗菌薬を内服しつつ翌日に受診したり，水分を過量摂取してから受診することがあるので，受診時の尿沈渣所見で膿尿所見が乏しいことも多い。特にプライマリ・ケアでは，総合病院と違って症状が軽い患者が発症間もない段階で受診するような側面も加わるので，尿沈渣の所見からだけで急性膀胱炎の有無を判断してしまうのは過ちのもとになる可能性があることに留意すべきである。

終末排尿時痛がみられるにもかかわらず，膿尿がみられないだけで急性膀胱炎ではないと診断してしまうと誤った判断になる恐れがある。

1 問診

前述の終末排尿時痛の有無に加えて，頻尿・残尿感・切迫性尿失禁・血尿などの自覚症状に注意する。また，自覚症状がどのように発症してどれくらい続いているのか，ということも重要な情報である。尿路感染症の多くは，発症時期もある程度自覚できるものである。

2 vital sign (発熱)

発熱がみられる膀胱炎の患者は，女性では急性腎盂腎炎，男性では急性前立腺炎や急性腎盂腎炎の可能性を考慮する必要がある。